

小次郎出郷作

仄起七言絶句

下平声八庚韻

底事陰風颯有聲

底事なにごとぞ陰風いんふう 颯さつとして声こゑ 有あり

山蹊寂寞獨營營

山蹊さんけいは寂寞せきばく 獨ひとり 營營えいえい

青年岸柳離家日

青年せいねん 岸柳がなりゆう 家を離いえるの日ひ

双燕飛來一劍生

双燕そうえん 飛とび来きたりて 一劍いちけん 生しょうず

平成十五年

二見 光耀

字 解

陰風いんふうは冷たい風。北風。

颯さつは風のさつと吹くさま。

寂寞せきばくはさびしくひっそりと静かなさま。

岸柳がなりゆうは自らを岸柳と名乗っていた。岸柳は「岸辺の柳のようにしな

やかさの有る剣」から名づけた。武蔵との決闘の島「巖流島」は決闘

後、小次郎の岸柳から名づけられたものである。

一劍生いちけんしょうは小次郎が編み出した燕返しつばねがえしの技。

意 解

権現の山頂から吹き降ろす風は静寂さを感じさせる。其の中にあつて燕返しつばねがえしの技を編み出すまで、独り黙々と修行を重ねた小次郎の勇姿が眼に浮かぶよう
往時が偲ばれる。「岸柳」と名乗っていた若き小次郎は一流剣士になることを心
に決め、五郎八茶碗を割って北坂下の生家を後に旅立つのである。

即ち「岸柳の滝」で、燕返しつばねがえしの技を編み出し、瞬く間に、小次郎の名が世に響
き渡った。それを祝福するかなのような門出となったのである。